

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

湯浅 拓也

【所属】(助成決定時)

流通経済大学

【研究題目】

近代日本外交における女性キリスト者知識人：河井道の日本 YWCA での実践とそれを支えた思想

【研究の目的】(400字程度)

国際連盟の事務次長として活躍した新渡戸稲造をはじめ、近代日本の対外関係に深い関わりを持ち、戦前期日本の国際協力活動を支えた人物の中には、多くのキリスト者知識人がいたことが知られている。

近年、社会・経済・文化的な側面も含めて近代日本外交を捉え直そうとする研究によって、戦前期に国際交流や国際協力などの活動に携わった人物たちの取り組みと日本外交の関係性が明らかにされてきた。しかしながら、女性知識人が果たした役割への関心は驚くほどに欠落している。日本のキリスト教界やミッションスクールなどの場において、女性キリスト者たちは女子教育だけでなく、さまざまな社会活動に参画していた。その中でも、本研究で焦点を当てている日本キリスト教女子青年会(日本 YWCA) は、1905 年に設立され、万国 YWCA 大会への出席や各国の YWCA との交流など早い時期から国際交流活動に取り組んでおり、国際交流団体のパイオニア的存在であった。

本研究の目的は、これまで研究上の空白となってきた近代日本外交における女性キリスト者知識人の役割について、日本 YWCA 総幹事を長年つとめた河井道に注目してその一端を明らかにすることである。そして、戦前期日本の対外関係に対して、女性キリスト者知識人がどのような影響を与えたのかを検討する。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、日本 YWCA などが発行する雑誌やパンフレット、研究対象人物の日記や書簡など幅広く史料を渉猟して事実の再構成を行う歴史研究の手法を採用した。当該期の外交文書や政府文書とともに比較しながら、立体的な分析を行った。

第 1 回日本 YWCA 大会が実施された青山学院大学の図書館や日本 YWCA において、同団体が発行していた『女子青年界』やパンフレット類についての基礎的史料調査の結果を踏まえて、本研究では、河井道が設立した恵泉女学園の学園史料室に収蔵されている河井道関係文書、河井道の出身校である北星学園(旧スミス女学校)史料室(百周年記念館)に収蔵されている史料の調査を実施した。そして、主に①第一次世界大戦期における河井道の平和論、②河井道が取り組んだシベリア難民救援事業、③戦間期における婦人平和協会での活動に焦点を当てて分析を行った。

日本 YWCA における河井道の社会的実践について、実証的に検討を行っていく上で、日本外交との関係性と他の国際的団体との連携に留意した分析を行った。日本 YWCA の取り組みを時系列に明らかにすることは、すでに『日本 YWCA100 年史』の他にも、世界 YWCA 関係資料(例えば、Anna V. Rice, *A History of the World's Young Women's Christian Association*, The Women's Press, 1947)や日本基督教団の史料(『日本基督教団史資料』日本基督教出版局、1997 年)などで明らかにされている。本研究では、海外での研究(Glenda Sluga and Carolyn James eds., *Women, Diplomacy and International Politics since 1500*, Routledge, 2016 など)を参考にしつつ、女性キリスト者知識人たちの取り組みが、近代日本の対外関係とどのような点に接点を有していたのか、YWCA などの他のキリスト教団体や他の国際交流団体とどのような連携を有していたのかについて分析を行い、日本外交における権力的な側面に対してどのような影響を与えたのかについて注目した。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究を通じて、これまで十分に検討が行われていなかった恵泉女学園を創設する以前の河井道の国際的な活動を実証的に明らかにすることができ、女性キリスト者知識人たちの取り組みが近代日本の対外関係とどのような接点を有していたのかという点について、その一端を明らかにすることができた。河井道をはじめとした女性キリスト者知識人たちは、YWCA という国際的なネットワークを通じて、お互いに問題意識を共有しており、第一次世界大戦に際しては徹底した反戦の立場を保つことができていた。しかし、彼女らの取り組みは、国家間関係とは無関係ではなく、シベリア難民救援事業などに見られたように政府とも一定の協力関係にあった。

本研究の成果を踏まえて、今後、河井道をはじめとした女性キリスト者知識人たちの国際的なネットワークの解明に取り組んでいきたい。すでに科研費（若手研究）にも採択されており、海外での史料調査を踏まえて、国内外の史料を照らし合わせつつ、より実証的に分析を進めていきたい。